

現在、新自由主義の影響でペアレントクラシーという親の影響力が極めて強い社会になっている。親の所有する富や願いが子どもに多大な影響を与え、人生を決定してしまう。また、核家族化が進み、家族の在り方が多様化している一方で、ひとり親、特にシングルマザーの家庭が経済的貧困に陥りやすい現状がある。この二つの風潮は、家庭をとりまく問題に思えるが、実は影響が大きいのはその子どもである。

これまで、子どもの貧困は親の貧困の延長線上や付随しているものとして扱われており、子どもを主体に考えるものではなかった。そこで本稿では被害の主体として子どもに焦点を当てている。ペアレントクラシーの社会において、シングルマザーの貧困はその子どもにどのような影響をもたらすのか、そして、それらを回避もしくは緩和するために必要なことは何かを明らかにした。

まず、子供の貧困の定義として、センの理論を用いて周囲と比べて潜在能力の欠如した状態であるとした。貧困とは経済的資本だけでなく、選択の自由をなくした状態でもあると考えられる。そして、そもそも母子家庭はなぜ貧困に陥りやすいのかを明らかにした。要因として男女の賃金格差、不利な非正規社員を選ばざるを得ない状況、キャリア形成を阻むメンバーシップ型雇用社会、家族主義と性別分業の社会規範などが考えられる。

そうした母子家庭の経済的貧困が子どもにどのように影響を与えるのかについて、ペアレントクラシーの社会では、親が教育にどれほどお金をかけられるかによって学力に差がつき、学歴が決定し、その後の人生を大方定めてしまうことが分かった。これらは子どもの将来への影響だが、子ども自身にとっても、子ども時代に感情格差を生むという影響がある。子どもにとって経済的貧困は、周りとは違うという感覚を与える。貧しいという理由で、やりたいことが出来ず、感情にセーブをかけることは、本来する選択肢がなくなったことである。これは、潜在能力の欠如と言い換えることが出来る。以上のことから、母子家庭は経済的貧困に陥りやすく、それはその子どもに潜在能力の欠如という別の貧困をもたらすことが分かる。

また、子どもの貧困を緩和するには、母子家庭の経済的自立及び貧困の改善、ペアレントクラシー社会の変容、感情格差の緩和が有効と思われる。いずれにしても、重要なのは周囲の環境を補い、整えることにある。子どもの貧困は潜在能力の欠如であるとしたが、それは様々な要因によって選択の自由が奪われた状態でもある。周囲の環境を整えることは、言い換えれば、彼らに選択肢を還すことである。子どもの貧困を社会の問題として捉え、支えていくことが目指すべき社会の在り方であると考ええる。